ジャンル超え文化発信

自宅稽古場を開放した日本舞踊舞川流家元　舞川 扇彩さん

生まれ育った川崎のため

お弟子さんへの教室や舞台もないのに、扇子をあしらった薄紫の着物に朱色の帯姿で出迎えられ、少々驚いた。「いつも着物ですから」。姿勢、身のこなしにも厳しい所作が問われる日本舞踊の家元とは思えない、柔和な顔が印象的だ。

川崎生まれの川崎育ち。物心ついたころから日舞を始めていたのに、ずっと「川崎には文化がない」。そう考え、地元に誇りを持てなかった。事実、十年ほど前までは知人らに住まいを尋ねられても「横浜から参りました」とかわしていた。「工場、歓楽街…そんな町に住んでいるなんて恥ずかしい」。そんな思いがずっとあったという。

転機は一九九五年、若宮八幡宮での「水鳥の祭り」。江戸時代初期、川崎大師周辺で、干拓に取り組んだ名主・池上太郎右衛門幸広ら一族と、儒者らが、大師河原で酒飲み合戦を繰り広げた故事にのっとり、当時の衣装で練り歩いてから、酒を飲む奇祭だ。

地元の知り合いの酒店主から裏方に誘われ「川崎にもこんな歴史があったんだ。それを伝えようと頑張っている人がいるなんて」と感動。「自分でも何かしたい」との思いが募った。

「川崎のために、川崎で、何ができるのか」。試行錯誤してたどり着いたのは日舞だった。「自分の踊りを見てもらって、伝統文化の舞踊に興味を持ってもらおう」と考えた。

舞川流家元となった十三年前、自宅を改装し稽古場を併設したが、二〇〇三年、その稽古場の改修を決意した。会社経営の夫の貯蓄まで取り崩して費用を捻出。翌年、舞台は広げられなかったが、防音壁にし、客席は平らから、座りやすく、見やすい階段状に大改修した。ところが、立派な客席を見て、当初とは違ったアイデアが浮かんだ。「舞川流の踊りだけじゃなく、まったく違うジャンルにも開放してみたらどうだろう」

「座・舞川」と名付けた稽古場では、舞川流の発表会はもちろん、二カ月に一回は「さろん・まいかわ」と銘打ち、アマチュア音楽家や落語家の発表会、日本酒試飲会など、多様な催しが繰り広げられるようになった。

「興味はあったけど、なかなか踊りは見る機会はなくて。この舞台で初めて舞を見て『これからも見に行こう』って思った」「この前、歌舞伎を見に行ったんですよ」。もともと稽古場にすぎなかった「座・舞川」が、文化の発信地になっていると実感する瞬間は、なじみ客から、こんな感想を聞くときという。

そのうえ、初舞台に立ったアマチュア演奏家らが、懸命にギターやハーモニカなどを演奏する姿を見ると「本当によかったって、自然と涙があふれる」と打ち明ける。

地元で好評を博している「さろん」に、最近は出演希望も増えている。「将来は三百六十五日、一年中、舞踊家や落語家らが発表できる場にしたい」。自ら新しい流派を立ち上げた日舞家元の夢は、膨らむ一方だ。そして、こう言い切った。「いろんな人と手を携えて盛り上げたい。川崎はもっと文化を発信できるはずだもの」

（鈴木洋生）

まいかわ・せんさい　1952年、川崎市川崎区生まれ。3歳から日本舞踊を習い始め、花柳流、藤間流、藤坂流などの流派で学んだ後、1993年11月、独立して舞川流を創設した。同区伊勢町の自宅兼稽古場で夫と暮らしている。

かお

研究開発機能 横浜市に集約

独自動車部品メ

世界有数の自動車部品メーカー「コンティネンタル・オートモーティブ・システムズ」（ツ）の日本法人「コンティネンタル・テー」が、国内五カ所にある研究開発機能を集約する横浜市神奈川区浜臨海部に集約することを決めた。誘致した市が明らかにした。

研究開発機能を集約するのは、本社のある新浦島町の業務施設クノウェイブ10の隣にある土地。同年前に本社を東京の業務施設に移転し、さらに研究開発機能

音楽の楽しみ知ろう

川崎を対象にショップストラ十五、西口の川崎シーホー房で同ホー八月エスタASAイベン